# 2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

| 所属学部　学科 | 職位 | 氏　　名 |
|---|---|---|
| 経営学部 地域ビジネス学科 | 教授 | 中山 孝男 |
| 最終学歴 | 学　位 | 専門分野 |
| 一橋大学大学院経済学研究科理論経済学及び統計学専攻博士後期課程単位修得満期退学 | 経済学修士 | 経済学 |

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

・「何事も基礎が重要」との基本方針のもと、演習も含め、すべての担当科目で最も基礎のレベルからの教育を実践する。

（目標）

・「経済学」では、昨年度まで使用してきたテキストの内容が若干古くなったので、今年度は、全国的に広く使用されている、標準的な内容のものに変更して講義する計画である。なお、授業の形態は対面での講義を希望する。

・「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」では、昨年までと同じく、教える範囲をあまり広げないことを心がけたい。漢字の読み編では、「日経新聞」の社説に登場する漢字の読みを（できれば）100%に近づけたい。また、数量編では、なんと言っても「%」をはじめとする「割合」に関する種々の分野で正確に問題が解けるように、小学校以来学んできて未だ十分には理解しきれていないところを中心に基礎から教えていく。

・「国際関係論」では、昨年度使用したテキストを再度使用して、さらに内容の濃い講義を進めていきたい。この科目の担当は、おそらく今年度で最後となるであろうから、過去数年間、担当者として身につけた知識及び考え方をしっかりと受講生に伝えたい。

・「総合演習Ⅰ・Ⅱ」では、テキストとして選んだ本の内容をできるだけ詳細に解説するつもりである。

（方針）

・担当科目のそれぞれで、科目内容について基礎的なレベルから丁寧に説明されているテキストを選び、授業ではまず（予習してきたはずの）テキスト内容を確認のために説明し、その少し上のレベルのことを教え、次回までにきちんと復習することを促す。

（計画）

・昨年度は、担当科目の半分以上がオンデマンド授業であったが、今年度は基本的に対面で行えそうなので、受講生の反応をよく見ながら「わかる授業」を実現していきたい。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

経済学、学びの基礎Ⅰ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

（後期）

現代経済学、学びの基礎Ⅱ、国際関係論、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

・前期の「経済学」では、テキストの選択がうまくいかなかった。上述のとおり、最近何年か使用してきたものを（ある理由から）今年度変更することにして、ごく標準的な内容のテキストを使用することにしたが、残念ながら選んだテキストの内容を教えるにはある程度の基礎知識が必要であった。つまり、テキストの内容を教える前提条件となる内容を授業で扱うことでほぼ授業時間を使うこととなり、満足な「経済学」の授業を実施できなかった。その結果、授業評価アンケートも平均を下回った。当然の（学生からは正直な）結果であった。

・「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」では、さすがにここ数年担当してきているので、（少なくともまじめに学ぼうとしている学生に対しては）その期待に応えられたのではないかと自己評価している。

・「国際関係論」では、本格的に科目内容を教えられたのではないかと考えている。

○作成した教科書・教材

・『学びの基礎Ⅰ　2022 年度版』

・『学びの基礎Ⅱ　2022 年度版』

○自己評価

・「経済学」に関しては、授業の内容そのものから大いに見直しが必要である。その他の科目では、現状の微調整程度の改善でよいのではないかと考えている。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

「マルクス相対的過剰人口論と現代の雇用問題」

○目標・計画

（目標）

・4 月の段階では、上記テーマを設定したが、その後、所属する経済理論学会の全国大会において報告予定者から学会報告のコメンテーターを依頼された。そのためそちらのテーマ（リカードウの遺稿「絶対価値と交換価値」に関するもの）の検討に若干時間を割かなければならなくなり、場合によってはそちらのテーマで論文としてまとめられるレベルの論点が見つかるかもしれない。少なくとも、今年度前半は、上記テーマの研究は一時休止し、コメンテーターとしての研究を続けることとなった。

（計画）

・前述の通り、今年度前半は新たなテーマでの研究、後半に上記テーマに関する研究を行うことにしたい。

・また、教育上の研究として冷戦時の（とくにヨーロッパにおける）政治情勢についての少し詳細に調べたい。これは「国際関係論」の講義内容を充実させるためである。

○2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・なし

（学術論文）

・中山孝男「リカードウ新機械論に関する一小論――機械導入後を中心として――」『東邦学誌』第 50 巻第 2 号、2021 年 12 月

（学会発表）

・なし

（特許）

・なし

（その他）

・経済理論学会全国大会において、「『絶対価値と交換価値』とリカードウの不変の価値尺度」（石井穰報告）に対するコメンテーター役を果たした。

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

・なし

○所属学会

・経済学史学会

・経済理論学会

・マルサス学会

・政治経済学・経済史学会

○自己評価

・他の報告書にも記載したが、今年度８月頃、経済理論学会の報告予定者から学会報告のコメンテーターを依頼され、そのテーマが私が長年研究してきたリカードウの価値論であったので、引き受けたことから、年度途中で研究テーマを変更した。変更後のテーマについては、今後継続して扱っていくだけの価値のあるものなので、私の研究者生活にとっての最後の研究テーマとすることにした。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

・今年は、何と言っても認証評価の受審年である。昨年度末以降、着々と準備してきた大学の「自己点検評価書」を完成させ、秋に実施される実地調査等、ほぼ年間を通して行われる受審に関する事項を、恙なく執り行い、認証評価において「適合」の判定を獲得する。

・上記に関する自己点検・評価実施部会の長として、また自己点検・評価委員会、衛生委員会、高大接続連携会議、入試問題作成委員会、等の委員として、加えて学園理事・学長補佐として、学内業務を遂行していく。

（計画）

・授業担当コマ数が削減されているとはいえ、受講者数の関係で今年度年間で６コマの授業を担当することになってしまった。そうした中で上記大学運営及び下記社会貢献も行わなければならず、きちんと時間配分を考えてやっていく。

○学内委員等

自己点検・評価委員会、自己点検・評価実施部会、入試問題作成委員会

○自己評価

・上記の委員会における委員としての仕事は、ほぼ問題なく果たせたと考える。ただ、「自己点検評価」担当の学長補佐としては、なんと言っても日本高等教育評価機構による認証評価で最後の最後まで危ういプロセスをたどったことは大いに反省せざるを得ない（たとえ、最終的結果がぎりぎりセーフであったとしても）。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

・本学での教育・研究の成果をできるかぎり地域社会に還元するように努力する。また、今年度も日本高等教育評価機構より大学認証評価委員に任命された。その方面でも社会貢献に努めてきたい。

（計画）

・東邦高校との高大連携授業や、他の高校からの出張講義要請などがあればできる限り応じて貢献する。所属する経済理論学会東海支部の会場校担当としても、対面での部会開催に際しては積極的に協力する。

○学会活動等

・ここ２年ほど新型コロナの関係で開催できていなかった経済理論学会東海部会を、会場校として開催できた。

○地域連携・社会貢献等

・東邦高校との高大連携授業には、担当者にならなかったので、貢献できなかった。

・日本高等教育評価機構の大学認証評価委員として、（3 年目にして初めて実地調査に赴いたことを含め）その任務を全うできたと考える。

○自己評価

・全般的に新型コロナの影響が出る以前の程度の、いろいろなことが復活できるようになった。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

・最低限、自分の専門分野としているところで研究教育を進めるのは当然と考える。それ以外の特に社会科学分野でもさまざまな知識・学問成果をできるだけ吸収した上で、講義やゼミにおいて学生に伝え、学ぶことの楽しさ、大切さを感じ取ってもらえるように日々努力していく。

Ⅵ　総括

・今年度後期には、授業の形態も新型コロナ以前に近いものに戻ってきたので、以前と同じような授業評価を得られるように教育面で努力していかなければならない。また、繰り返し言及しているかもしれないが、研究者生活としての最終局面に入ったので、研究テーマ（リカードウの価値論）に関しても何らかの自説を発表できるようにこつこつと研究を継続していく。

以　上